

## 第7章 論理的思考編

最後の章では、話がいくぶん細かくはなるが、**比喩表現**をどう訳すかという問題や、**英単語のニュアンス**まで把握していないと文全体の論旨と矛盾してしまうといった問題について、京大の過去問の中からいくつか検証してみたいと思う。

まず、比喩表現についてだが、素直に直訳のままでもよいものもある。むしろ直訳の方がニュアンスが伝わりやすいということもあるだろう。特に文学性の高い文章においてはそうである。論説文でも比喩が有効に作用する場合もある。が、本書では敢えて**比喩表現**を説明調で訳す路線を取ることにする。というのは、文化によってたとえるものが少しずつずれることがあり、かなりの経験者でないとその識別は困難だからである。例えば日本語の「牛歩」は英語では **at a snail's pace** で「カタツムリ」でたとえる。仮にこれを **ox** や **cow** などで英訳したとしても理解はしてもらえないかもしれないが、英語を母国語とする人にはしっくりこないだろう。

次に、単語集や単語カードなどで英単語と日本語を一問一答式に学習しているだけではわかってこない英単語独特のニュアンスというものがある。また、一つ一つの単語の訳は一問一答式でよいとしても、いくつかの単語が組み合わせると、思いもよらない別の意味になってしまうこともある。適当に物質を混ぜていたら有毒ガスが発生してしまうような現象である。**A likely story** は直訳だと「ありそうな話」となるが、これはむしろ「ありそうもない話」に対して用いて「まさか、嘘でしょ」という意味になる。皮肉から転じたものだが、知らないとはやはり誤訳してしまうことになる。

このようなことを考慮するたびごとに、言葉というものの奥深さに感銘すると同時に、言葉の達人になることの困難さを痛感する。そして、皮肉やユーモアのある言葉の使い方まで自由自在に使いこなす人間の脳というのはいったいどういう構造をしているのだろう。これをロボットや自動翻訳機は将来、処理できるようになるのか。いろいろと考えてしまう。